

ふるさと見て歩き

第141回

部垂村の大火と東富稲荷

東富地内、国道293号沿いに立派なほころ祠があり、鳥居には「東富稲荷」という扁額へんがくが掲げられています。一見新しそうなこの東富稲荷、実はかつて大宮地域を襲った災害と関係があるそうなのですが…。



▲東富稲荷

【部垂村の大火】

大宮地域の旧市街地を襲った火事といえば、昭和26年(1951)の大火が知られていますが、その150年近く前の江戸時代、まだこの地域が部垂村と呼ばれていた頃にも、町は悲惨な大火に見舞われていました。

時に文化2年(1805)旧暦2月(6日か)の深夜、北二丁目より発生した火の手は、折からの強風にあおられ、たちまち部垂村の町内をなめつくしました。「東富記録」という古文書(個人蔵)によれば、「夜明ヶ方迄二ハ、町中本家百五十七軒、蔵・雑部屋等棟数五百軒余焼失、東西之別チナク女人(子供)見共等ハナキサケビ(泣き叫び)、施主たる者は只ボウセントシテ憂ヘル而已」という惨状でした。

数日後、水戸藩八田陣屋の郡奉行所は、復興策の一つとして「村を商家と農家に分け、商家は商売に専念し、農家は耕作に専念せよ。農家の内30人は宿の外に家を建て、移り住むように」と命じました。部垂村は南郷道と久慈川の舟運の結節点として栄え、宿内には多くの商家が立ち並んでいました。火除けのため、家数を減らそうとしたのでしょうか。

また、藩は治安維持のため、宿の四方に木戸を立て、その外では商売を禁じました。宿外に出されては、副業での商いも出来なくなります。村民は「移住は免除して欲しい」と役所に願いますが、決定は覆らず、12軒の農家が横町北の木戸の外(言い伝えでは「原」と

呼ばれていたそうです)に入植し、字を「東富」と改めました。

【東富の坪氏神として】

ところで、東富の北にある姥うばが賀地区には、かつて牛頭天王を祀った素そが鷲神社が鎮座し、東富を含めた一帯の鎮守として信仰されていましたが、元禄年間(1688~1704)、水戸藩の一村一社制によって、甲神社の摂社としてその境内に遷うつされていました。

大火を機に東富に移り住んだ人々も、毎年旧暦の11月1日に「天王講」として牛頭天王のお祭りを行っていましたが、やがて東富地内に坪氏神がいないことを、残念に思うようになりました。そこで安政5年(1858)、村役人を務めていた北二丁目の立原家が屋敷神として祀っていた稲荷大明神を分祀し、東富の坪氏神とすることにしたのです。

こうして誕生した東富稲荷は、160年以上に渡り、地元の人々に親しまれてきました。現在では東富区の所有となり、祠や鳥居も新造され、お祭りは8月の区民のつどいの際に続けられています。



▲大宮村検地絵図(東富部分、常陸大宮市文書館蔵) 天保検地の際のもの。まだ家数は少ない。

【おわりに】

東富稲荷は、突然の災害や藩の政策によって翻弄されながらも、たくましく生きた人々やその子孫たちの、心の拠り所として建てられました。皆さんの近所の路傍にたたずむ小さな祠にも、意外な由緒があるかもしれません。調べてみてはいかがでしょうか。

【謝辞】今回の取材では、東富町の立原和正さん、河野寿昭さん、大曾根靖夫さんにお話を聞かせていただきました。ありがとうございました。

【参考文献】『大宮郷土研究』1(大宮町郷土研究会、1997)、『大宮町の年中行事』(大宮町歴史民俗資料館、2000)

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化振興グループ ☎52-1111(内線343)